

vol.
116
2021
Winter

市民活動情報誌

Collaboration Paper
for Voluntary Network in Ohmi

あうみ ネットワーク



暮らシフト研究所代表
寄稿:藤田知丈さん

「石徹白洋品店」店主

インタビュー:平野馨生里さん

▶ご紹介はP2

「特集」「移住してみたいですか?」
～移住者が語る本当の豊かさとは～



Contents

[特集]「移住してみたいですか?」	P2~4
人と地域とつながる事業所さん	P5
企業の社会貢献活動 わたしたちのサボ活!	P5
市民活動レポート	P6~7
おうみ未来塾リレーエッセイ	P7
応援インフォメーション	P8



Ohmi Network Center

淡海ネットワークセンター

公益財団法人 淡海文化振興財団

<https://ohmi-net.com/>



「移住してみたいですか?」

~移住者が語る本当の豊かさとは~

いま、地方移住を考えている人が急増しているそうです。

以前は、定年を迎えた方が第二の人生として田舎に引っ越す、というイメージがありました。最近は、若年層を中心に地方への移住が増えているようです。その理由は様々ですが、私たちがこの一年余りで経験したコロナ禍による生活様式の変化がさらに後押しをしているのも確かでしょう。また、受け入れる側も特色ある支援施策を打ち出し、移住への関心がますます高まりをみせています。

そこで今号と次号で「移住」を特集し、実際に移住した方からの想いや声を通して「移住」を、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

◆寄稿:藤田知丈さん ◆インタビュー:平野馨生里さん(前編)

琵琶湖水源の森から、持続可能な暮らしづくりを

暮らしシフト研究所 代表
藤田知丈さん

琵琶湖を守る人々に魅せられ、滋賀へ

島根県の田舎から、京都の大学へ進学。在学中に交換留学制度が始まり、その第1期生として1年間イギリスで学べることになりました。情報工学専攻だったのですが、留学先では



MAGATANIA全景



MAGATANIA店内

好きな学科を選べたので、当時まだ日本の大学にはほとんどなかった「Environment Study (環境学科)」を選びました。留学は1994年~1995年のことで、その間に日本で阪神大震災が起き、ラジオにかじりついで英語のニュースに耳を凝らしていたのを覚えています。

帰国後、教授の紹介で琵琶湖研究所（現・琵琶湖環境科学研究センター）に通い、琵琶湖・赤野井湾の水質保全に取り組む市民団体「赤野井湾流域協議会（現・認定NPO法人びわこ豊穣の郷）」の活動をITで支援するという、環境学と情報工学を組み合わせた修士論文を取り組みました。そこで出会った市民団体の皆さんのがふれんばかりのパワーと琵琶湖愛に感銘を受け、私自身も琵琶湖が大好きになって、そのまま近江八幡市のコンサル会社に就職。駅前の便利なアパートと会社を往復する日々が始まりました。

琵琶湖から水源の森へ

2005年、もっと自分の可能性を伸ばしたいと考え、「おう

み未来塾」に入塾。県内各地で活躍する先輩地域プロデューサー達の現場を見聞し、自らもグループ活動で仲間と一緒に地域の現場に入って地域映画づくり、野外コンサート、食育活動などに取り組みました。

琵琶湖の環境保全活動との関わりを続ける中で、琵琶湖の水や生態系を守るには、水源の森に目を向けなければならぬことに気が付きました。そして、2011年の東日本大震災での原発事故を機に、「地域固有の自然や文化などの資源豊かな地方が、都会の暮らしを支えるために犠牲になることなく、衣食住エネルギーをローカルに自給できる循環型コミュニティを滋賀で実現したい」と考えるようになりました。山林・農地・水・動植物…すべてが揃った中山間地域こそ次世代のフロンティアだ、との信念で、琵琶湖の周りの山里をめぐっていた中で、伊吹山の優麗な姿を目にした時、未来塾生時代に同期生のグループが活動拠点としていた奥伊吹・曲谷の森の中の2haの空き地「大持広場」がふと頭に降りてきて、そのご縁で地元の空き古民家を紹介していただき、2014年春に移住しました。

森をナリワイに活かすしくみづくり

移住してすぐ、「暮らシフト研究所」という屋号で独立起業しました。仕事や地域活動での経験・ノウハウ・スキルを活かし、環境活動や地域づくり活動へのコンサルティングや情報デザインの仕事を個人で請け負いながら、地元の棚田で自然農に取り組む「半農半X」生活が始まりました。自宅の敷地では週替りで食べられる山野草が育ち、棚田では多様な生態系の営みのドラマを愉しみ、自然に生かされている幸せを感じる日々は本当に豊かで、これこそ人間らしい暮らしだだと実感しました。

地元のまちづくり団体にも入って、過疎化に歯止めがかからない地域の活性化策を地域の方々と一緒に検討しました。土地の9割以上が山林なので、この山林を地域資源として活かす取組こそ起死回生の本流と考え、少人数で地元の里山を持続的に守り活かす「自伐型林業」に着目しました。米原市との協働で、地域おこし協力隊制度を活用して募集したところ、街の若者3名が自伐型林業の担い手として移住してくれました。彼らとともに一から自伐型林業のノウハウを学び、3年間で、どうにか自分たちでひと通りの山仕事をこなせるレベルになりました。チーム名は、琵琶湖水源の「森」を「守る」から「びわ湖のもりびと」と命名されました。ちょうど国の方で森林環境税が導入され、私たちの活動に対して継

続的な支援をしていただけようになりました。メンバーの一人は、森を守る活動から出てきた間伐材を食器などに加工するグリーンウッドワークの技術を身に着け、「スーパー生木ラボ」を起業してくれました。

移住の決め手になった「大持広場」は自治会所有のコミュニティ施設でしたが、集落から離れていることもあり、地元ではほとんど利用されず、管理が大変なだけのお荷物状態になっていたので、暮らシフト研究所の活動拠点として使えるよう自治会と交渉して、継続的に借りられることになり、自然に囲まれた健康と癒やしの拠点として、2021年6月にヴィーガン&オーガニックなカフェ・ランチ・ショップ「MAGATANIA」をオープンしました。

コロナがもたらした、田舎暮らしの新たな可能性

今は、SNSの普及で、先輩移住者の生の情報を集めたり、直接アポを取って相談することができるようになっています。さらに、コロナ禍の影響でリモートワークが急速に普及し、苦労して田舎で一から起業しなくとも、都会の会社に籍を置いたまま田舎で暮らしたり、複数の拠点を転々としながら暮らすライフスタイルも可能になってきました。こうした新しい「関係人口」をうまく取り込めば、過疎から脱却して、琵琶湖水源の山里に、ストレスフリーで健康で持続可能な循環型コミュニティが創造できるかもしれない、と期待しています。

Profile

寄稿：藤田 知丈さん

暮らシフト研究所代表・「MAGATANIA」店主、おうみ未来塾7期生
滋賀県米原市、姉川源流・奥伊吹の山里に移住
“心も身体も環境も持続可能な暮らしの実現”をめざして研究＆実践活動中
ホームページ <https://magatania.com>

「石徹白洋品店」店主 平野馨生里さんインタビュー

岐阜県郡上市、日本三名山に数えられる白山の麓、標高700メートルの高地にある「石徹白」という小さな集落に2011年から家族で移住し「石徹白洋品店」を営む平野馨生里さん。

コンビニも商店もなく、冬は雪との生活。過疎・高齢化も進んでいた石徹白に、なぜ移住を決めたのか、移住先での仕事や子育てなど、現在の暮らしを前編、後編に分けてお届けします。

●石徹白に移住を決めた、一番のきっかけは？

平野さん まず、安心して暮らし、子育てができるところを探していました。ここなら安心してできそうだなと。そして、この地域の人たちと過ごしたら楽しそうだなあって感覚的に思つたんです。

原則として食べ物は、自分たちで作っていて水も豊か。何が起っても生きていける強さがあって、安心感がある。こんな人たちの住む場所に住みたいなと思いました。



自伐型林業の担い手
「びわ湖のもりびと」

●移住前に何度も足を運び、いざ移住となったときに受け入れはスムーズに?

平野さん 当時、小学校が廃校寸前で、地域の存続が危ぶまれる状態でした。そこで地元のNPOの人たちが、何のつながりもない若い私たちを受け入れてくださいました。今では子育て世代の移住者が増え、子どもも生まれ、小学校は存続しています。

●そこから石徹白の生活が始まるわけですね。仕事はどう考えておられましたか。

平野さん それまでのキャリアは石徹白では活かせないな、とは思っていて、「洋服をつくろう」と移住前に考えました。

石徹白の人と何か一緒にモノづくりがしたいと考えていました。石徹白は冬は雪で閉ざされてしまうので、縫い物やモノづくりが得意な女性が多いんです。そこで、洋服をつくろうと思い、移住前に洋裁学校に2年間通いました。

移住してからでは無理ですからね。街に住んでいる間にできることは何だろうと、準備しておくことは大事かなと思います。

●そこから「石徹白洋品店」をオープンされ、昔から農作業着として地元にあった「たつけ」を復活させ、アレンジして縫製・販売。「仕事」を生み出していくわけですね。

平野さん 洋裁を勉強したのでわかるのですが、和裁の考え方でつくられている「たつけ」は、残布がほとんど出ない。無駄がなく機能的な「たつけ」に、日本人がつくってきたサステナブルな社会のベースがここにあると確信し、いまに伝えたいと思いました。このように地域に根付いた暮らしの中にあるものを形にして、豊かにしていきたいという想いと、ここでモノづくりがしたいという想いが重なって仕事になっていきましたね。



笑顔が素敵な石徹白洋品店のスタッフの皆さん

●移住するにあたって子育ての環境も重要なと思います。特に平野さんは安心して子育てがしたいという思いで移住されましたか、いかがですか。

平野さん 集落の皆さんと子どもたちは、お互いに顔見知りで本当に安心です。集落の皆さんに子どもたちを育ててもらっている感じがします。

都会では、「知らない人には声をかけられたら逃げなさい」なんて言われて育ちますが、ここでは、子どもたちが人を人

として信頼している。これは都会ではなかなか難しいですよね。

子どもの数も少ないので、気まずくなつたからといって別の友達と遊ぶわ 自然の中でのびのび育っている子どもだけにもいいかない。だから子ども同士で解決しようとします。それで信頼関係が深まっていく。この力も小規模ならではの良さだと思います。

病院は、車で30分のところにありますが、子どもの具合が悪くなつてもすぐには病院に連れて行かなくなつました。語弊があるかもしれません、これなら寝ていれば大丈夫だうといったようなことがわかるようになってきました。すぐに何かに頼るんじゃなくて、自分の頭で考えて子どもをみていくのも親の責任だと思っているので、そういった意味で、子どもの様子をよく見るようになりました。

豊かな自然と安心できる場所と人に囲まれ、自分が願っていた子育てが叶っています。

石徹白の子どもたちは、地域の子どもって感じですね。

ちなみに現在、平野さんは4人の男の子のお母さん。息子たちがのびのび走りまわる姿が目に浮かんできます。

Profile

インタビュー：平野馨生里さん

「石徹白洋品店」店主

2011年に岐阜県郡上市白鳥町石徹白に移住

地域に伝わる農作業着をリデザインして商品化することで地域文化を発信。

※平野さんは以前、近江八幡市島町の「ほんがら松明」の復活を取材されたことがあります。滋賀県にもかかわりを持っておられます。

ホームページ <https://itoshiro.org>

さて、前編はここまでとなり、後編は次号に続きます。

今回は石徹白での「仕事」と「子育て」を中心にお届けしました。一番下の息子さんを抱きながら笑顔でお話しきださる平野さんに、心が満たされている石徹白での日々がうかがえます。次号では、地域とともに暮らすことで平野さんが大事に思うことや今後の想いを中心にお届けします。どうぞお楽しみに!

藤田知丈さん、平野馨生里さんの移住のきっかけから今の暮らしを通して、皆さんに「移住」について、どのような感想をお持ちになったでしょうか。

移住にあたっては「仕事」や「家」、「地域との関係性」などが重要なポイントとなるでしょう。そのうえで、お二人からは何よりも「自分の生き方」を大事にされていることがわかります。利便性が優先される世の中で、自分にとっての「本当の豊かさ」を求めるお二人の姿。「移住」とは、自分の生き方を体現することなのかもしれませんね。

さて次号も、皆さんと一緒に「移住」を考えてみたいと思います。





「株はたけのみかた」

農家さんとベビーフード。みんなが笑顔になるために

滋賀県内20軒ほどの有機農法農家と契約し、その野菜でベビーフードを製造、販売している湖南市の「株はたけのみかた」は、代表の武村幸奈さんが仲間とともに学生時代に起業された会社です。「農業を通して社会の課題、困りごとを解決していきたい。滋賀の農家さんの想いをもっと広めたい!」。そんな想いから、たどり着いたのがベビーフードだそうです。武村さんにお話をうかがいました。

武村さんは、学生時代、地産地消で地域を盛り上げたいとの想いで「伏見わっしょい新党」という団体を立ち上げ、そこで農業と初めて関わります。農家さんの熱い想いを聞く一方で、誇りを持ちながらも農業だけでは経営が難しく廃業していく姿に悔しさを感じ、自分にできることはないと起業を決意。「農業は人間の生きること全てに関わり、きっと社会を守る存在へとなるはず。ビジネスで農業の価値や目線を変えたい」という想いから、ベビーフードの開発へとつながりました。

なぜ、ベビーフードなのか——学生時代に有機野菜の販売の活動をしているとき、電車を乗り継いで買いにくる多くのお母さんたち。不思議に思い聞いてみると、「安心で安全なものを子どもには食べさせたい」との言葉に、「子どもを持つと、今までの価値観が変わるんだ」と衝撃を受けたとの

こと。そこから子育て世代に何かできないかと考え、ベビーフードにたどり着きます。

しかし、そこには「仕方なく与えてしまうもの」、「美味しいくない」など、マイナスのイメージがあることに気づきます。それであれば、最高の作り手の野菜はある!これで赤ちゃんに食べさせてあげたいベビーフードを作ろう!と試行錯誤を重ね、野菜本来の味がする、美味しい親子が笑顔になるベビーフードを完成させました。

農業を通して社会の課題(子育て世代の悩み)を解決したいという武村さんの願いが叶い、ベビーフードは、どんどん販路を広げているそうです。

そんな「はたけのみかた」には、他にも素敵な構想があるそうです。農業を通して、どのような新しい世界を滋賀から私たちに見せてくれるのか、とても楽しみですね。



manma 四季の離乳食

- 代表／武村幸奈 ●設立／2014年
- 連絡先／〒520-3221 滋賀県湖南市三雲407-2
TEL:0748-76-4789
<https://hatake-no-mikata.co.jp/>

Ohmi Essay

企業の社会貢献活動 わたしたちのサポ活!

地元の次世代を育むサポートを

甲賀高分子は創業以来50年、滋賀県に立地する企業として様々な地域貢献に携わるだけでなく、環境問題に対応する製品等の拡販等、本業を通しての社会貢献を常に意識した事業展開を行っています。

当社の地域貢献の一部をご紹介しますと、地元の湖南市石部にある「フットサル滋賀石部スタジアム」を運営する滋賀県フットサル連盟の活動や、石部小学校の環境学習を支援しております。

フットサルスタジアムの支援に関してはネーミングライツを取得し、「甲賀高分子スタジアム」に名称が変わりました。フットサルを通じて健全な青少年育成や様々な人の活発な交流の場となることを目指しています。昼夜を問わず子どもから社会人まで様々な方々がプレイし、盛況です。

環境学習の支援に関しては、生徒と一緒に野洲川に注ぐ宮川の水質調査や清掃を行っておりま

す。この活動は生徒にとって環境保全の大切さを学ぶ貴重な機会となっています。

本社がある湖南市から滋賀県の発展につながるように、今後も地域貢献活動を行います。



2005年4月の開設以来、法務省主唱「社会を明るくする運動」でのフットサル大会をはじめ、様々な大会が行われました。子どもたちのスクールや一般の利用も盛んです。

甲賀高分子株式会社 経営企画管理部

木本慎太郎さん

文化・芸術

眠っている地域の歴史を自分たちのミュージカルにのせて



市民ミュージカル団体「甲賀文化輝き」は、20年前からミュージカルを通して、地域（甲賀市）にまつわる歴史や文化を発信してきました。今回は代表の大原さんとスタッフ兼キャストの児玉さん、設立当初を知る山嵩さんの3名にお話をうかがいました。

「甲賀文化輝き」のきっかけは、新しい文化施設「忍びの里プララ」の建設にあたり、文化芸術活動をされている市民の皆さんとの話し合いがあったことにさかのぼります。それまでの文化施設での上演は、音楽や芝居など県外からプロに来てもらうのが主流でしたが、地域の文化は地域の人たちで創り上げよう、それがまちづくりにもつながるはず、そしてそれをミュージカルによって実現したいと設立されたそうです。この経緯を、懐かしく話す皆さん。いろいろな思いがよぎつたことでしょう。

さて、昔も今も変わらずスタッフも出演者も全て一般市民。ほぼ未経験者で舞台を創っていくので、一本の舞台を創るのに最低1年はかかるそうです。そのうち約半年、毎日曜日が稽古日となり、「みな一般市民で学校や仕事があり、その時間調整と全員の気持ちを揃えていくことが一番大変です」と大原さん。しかし、そんな苦労も公演後の達成感で全てが報われるそうです。児玉さんも「衣装に袖を通す時の胸の高鳴り、本番の客席からの大きな拍手が忘れられず、何度も泣けそうになるなか、ここまで続けてきました」と笑顔が素敵でした。お二人にとって、このミュージカルで出会い、地域の文化を知るきっかけになったことは、大きな宝だそうです。

いくどの困難を乗り越えて、若い世代に引き継がれ、20年前の設立の想いが確実につながっていると感じた取材。次のミュージカル公演は2022年3月12日・13日の予定で、甲賀忍者をテーマにしたコメディ作品です。今から楽しみですね！

YouTubeでも静止画ムービー「それいけ！輝き忍術学園」を配信中！公演前にぜひチェックを！

2021年度「ひわこ市民活動応援基金」助成団体

甲賀文化輝き

●代表／大原佳代子 ●設立／2000年
●<https://www.kokabunkakagayaki.com/>

介護者支援

我らケアメンの応援団！



「ケアメン」という言葉をご存知ですか。今まででは男性は外で働き、女性は家庭を守り、女性が親の介護を担っていくことが当たり前でした。しかし、女性も仕事を持ち同居も少なくなった今、男性の介護者が急増。そんな男性介護者を「ケアメン」と呼ぶそうです。

今回、いち早くケアメンが集う「中北の家」、「彦根こんき会」を立ち上げられた「公益社団法人認知症の人と家族の会滋賀県支部」相談役の小宮俊昭さんにお話をうかがいました。

小宮さん自身、お母さんと義母さん、お二人の介護をされた経験者。そのなかで男性は悩み事を話すことが苦手なうえに、相手が女性だと一層話し難いと感じ、「男性介護者のつどい」を守山市内で立ち上げられ、2013年には、より集まりやすい場所として、社会福祉法人野洲慈恵会が運営する地域交流施設「中北の家」に拠点を移されました。立ち上げと同時に10名以上の男性介護者が集まったということで、やはり男性介護者だけの会は待ち望まれていたのでしょうか。

「中北の家」に場所を変えても、各地域から男性介護者が集まり、近況報告から介護の情報交換、特に男性ならではの介護の悩みを打ち明けられるのは、ここならではのこと。つどいは「智慧の宝庫」であり、また心身ともに男性介護者の「安心できる居場所」となっています。

それでもまだ必要な人に情報が届かないのが小宮さんの悩み。ケアマネージャーさんに、「男性は一人では参加しにくいもの、最初は付き添ってあげてほしい」など、男性の特性をアドバイスしたり、集いの案内通知には一言添えるなど、参加者が来やすいように工夫を重ねておられます。

「男性は一人で抱え孤立しがち。また『男性だから』という価値観にもとらわれる。そこにとらわれず、仲間になってほしい」と小宮さん。「中北の家」の扉を開くケアメンが一人でも増えることを願う取材でした。

男性介護者のつどい「中北の家」

●代表／小宮俊昭 ●設立／2013年 ●連絡先／080-3797-4530(小宮)

環境問題

自由度を優先!個人があって組織。それが僕らです



今回、取材を受けてくださった代表の高須さんをはじめ、渡辺さん、坪井さん、細野さんの4名が所属する「Fridays For Future (F.F.F) 滋賀」は、県内の大学生を中心となって環境問題に取り組む団体です。

設立のきっかけをお聞きすると、様々な社会問題を考えるなかで環境問題からアクションを起こし、問題提起をしていこうと高須さんと坪井さんが思い立つことがそのきっかけ。そこに「二人がやるならおもしろそう!」と、次々に仲間が集まり、F.F.F滋賀ができたそうです。

そんなF.F.F滋賀が環境問題に取り組む姿勢は、「面白く、楽しく取り組もう!」。この姿勢は、単に危機感から問題を解決するより柔軟に行動できるのかもしれません。実際に、身近なごみ拾いをする一方で、滋賀県から委託を受け、NPO法人とともにワークショップの運営や、シンポジウムへの登壇など、幅広い活動をみせています。

そんなメンバーが活動を通して感じる「滋賀」は、県民の環境に対する意識の高さと、琵琶湖に対する熱い想い。ほぼ県外出身者のメンバーにとっては、大きな発見と驚きだったようです。だからこそ環境先進県として、滋賀はもっと「攻めて」ほしい、そこにF.F.F滋賀が何かサポートしてみたい!と、力強く語ります。この想い、ぜひ届いてほしいですね。

さて、今後の活動を尋ねると、県内企業とのつながりを持ち、一緒に何か取り組みがしたいとのこと。発想ゆたかなF.F.F滋賀と企業のコラボレーション、実現を期待したいところです。

最後にF.F.F滋賀の強みをうかがうと、「まとまりがないことが強みです」と笑うメンバーの皆さん。しかし、お互いが自立し、それぞれの活動を応援しあうスタイルは、自由でしなやかな「まとまり」を感じました。これからも活躍が一層楽しみですね。

※メンバーは随時募集中だそうです。興味のある方はぜひ問い合わせてみてください。

Fridays For Future滋賀

●代表／高須海地 ●設立／2020年 ●連絡先／ffffshiga@gmail.com
●https://www.instagram.com/fff_shiga_japan/?hl=ja

Challenge

おうみ未来塾
リレーエッセイ

Relay Essay

宇佐山城跡

プロデュースする

淡海ネットワークセンターで、「おうみ未来塾」の話を聞き、「おもしろそう」と思い入塾しました。基礎実践コースでは県内の活動事例を見学に行くことが毎回楽しみで、創造実践コースでは大津ナカマチ商店街を盛り上げる「base Otsu_cross」の活動を行いました。

卒塾から数年後のある日、旧滋賀村の歴史遺産を紹介している「滋賀村プロジェクト」の方から、「大河ドラマ『麒麟がくる』の影響で宇佐山城跡に登りたい人が増えています。城跡等を紹介する活動に参加してみませんか?」と声をかけてもらいました。宇佐山城跡に行ったことがなく、「何もない山になぜ皆さん登りたいのだろう?」と思いながら山頂まで登ると、そこには450年前に積み上げられた石垣が残り、素晴らしい琵琶湖の眺望が広がっていました。

基礎実戦コースで、近江八幡市の西の湖に浮かぶ小島「権座」を訪れた際、7期卒塾生の方の「何もない、舟で渡る酒米の田んぼに人なんて集まらないと思っていたら、そこが魅力的な場所だった」という言葉を思い出し、家の近くの「地域資源」に気づいた瞬間でした。

現在、未来塾での学びを生かし、宇佐山城跡をプロデュースするアイデアを少しずつ実現しています。織田信長と明智光秀が、琵琶湖の風景を見ながら天下統一の夢を語り合った「宇佐山城跡」、「宇佐山テラス」に登ってみませんか?

おうみ未来塾 第13期生
川崎 慶介さん

・「base Otsu_cross」
・「滋賀村プロジェクト」
メンバー



Winter Information

市民活動を応援

する淡海ネットワークセンターの事業をご紹介します。

募集

2022年度 未来ファンドおうみ助成事業の募集

未来ファンドおうみ助成事業の募集が始まります。募集にかかる説明会を開催いたします。多くの方のご参加・ご応募をお待ちしています。

【助成事業】

- ①びわこ市民活動応援基金助成
- ②びわ湖の日基金助成
- ③積水化成品基金助成
- ④笑顔あふれるコープしが基金助成
- ⑤ナカザワNEOフレンドシップ基金助成
- ⑥げんさん食育NPO基金助成
- ⑦湖国文学活動応援むらさき基金助成
- ⑧びわ湖源流の木遣い応援もえぎ基金助成

【応募受付期間】

2021年11月19日(金)～2022年1月14日(金) 17時必着

【募集説明会＆申請書の書き方講座】 ※申込要

大津 12月 7日(火) 14:00～15:30 淡海ネットワークセンター
米原 12月 9日(木) 10:30～12:00 米原公民館3A研修室
水口 12月16日(木) 10:30～12:00 水口中央公民館 会議室1
オンライン 12月11日(土) 14:00～15:30 ZOOM
オンライン 12月14日(火) 14:00～15:30 ZOOM

※募集案内・申請書のダウンロード、説明会の申込みは
下記URL(またはQR)をご覧ください。

<https://ohmi-net.com/jyosei/bosyu/>

【申込み・問合せ】淡海ネットワークセンター(佐藤) TEL.077-524-8440



セミナー 案内

クラウドファンディング活用講座 ～クラウドファンディングを活用して 自団体の資金調達力を底上げしよう～

【日時】2021年12月18日(土) 14:00～16:00(予定)

【講師】西村 昌弘さん 【開催】オンラインセミナー(Zoom)

【申込方法】申込フォームまたはE-mail(講座名、お名前、メールアドレス、電話番号を明記)にてお申込みください。
申込みフォーム:

<https://forms.gle/KxADiZMrc1ADD82A>
E-mail: office@ohmi-net.com

【問合せ】淡海ネットワークセンター(佐藤) TEL.077-524-8440



お知らせ

社会的インパクト評価普及促進事業 今年度の事業予定

- ・オリジナルのワークシート作成
- ・県内活動団体への出前講座
- ・「社会的インパクト評価」セミナー
- ・普及に向けて活動団体への個別訪問
- 2月に開催予定(オンライン)
- 以上の内容で取り組む予定です。

編集後記

便利って本当にいいこと?特集の藤田さんと平野さんのお話から考えました。お二人の移住先は、いわゆる「何もない」、「不便」などころ。決して「便利」を優先されていません。それどころか、そこから生活を愉しまれている姿に「便利がいいこと」とと思い込んでいる自分に気づきました。本当に優先されるべきことは自分の中にある。そんなことを感じました。

今号も取材先の皆さまの熱い想いとお言葉に心から感謝とお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。(辻ゆかり)

淡海ネットワークセンターは、県内の市民活動、NPOをサポート・ネットワークしています。

発行日／2021年12月1日 発行所／公益財団法人 淡海文化振興財団

〒520-0801 大津市におの浜1-1-20 ビアザ淡海2階

TEL:077-524-8440 FAX:077-524-8442

<https://www.ohmi-net.com> E-mail: office@ohmi-net.com

開館日：市民活動ふらっとルーム／火～土曜日(火～金曜日の祝日は休館)

事務所／火～日曜日



この印刷物は大豆油インキを含む植物油インキを使用しています。

お礼

未来ファンドおうみへ ご寄付ありがとうございます。

貴重なご寄付を賜りました皆様方に心より感謝申し上げます。この支援金は、滋賀の市民社会を良くしようとがんばっておられる市民活動団体へ助成し、皆様のお気持ちを伝えながら、おたがいさまがつながり、活きる地域を創るために活用させていただきます。

- 一般社団法人 比良里山クラブ様 「びわ湖の日基金」
- 近江通商株式会社様 「びわ湖の日基金」
- 株式会社ナカザワ様 「ナカザワNEOフレンドシップ基金」
- 株式会社ロハス長浜様 「びわ湖の日基金」
- 元三フード株式会社様 「げんさん食育NPO基金」
- 生活協同組合コープしが様 「笑顔あふれるコープしが基金」
- 積水化成品工業株式会社様 「積水化成品基金」
- 有限会社 豆藤様 「びわ湖の日基金」
- 匿名 「びわ湖源流の木遣い応援もえぎ基金」
- 匿名 「湖国文学活動応援むらさき基金」

(50音順)

下記の皆様から賛助会費をご入金いただきました。
厚く御礼申し上げます。

【法人・団体会員】

甲賀高分子株式会社、滋賀ダイハツ販売株式会社、生活協同組合コープしが
税理士法人横井会計、琵琶湖汽船株式会社

【個人会員】

板倉 成子、遠藤 恵子、岡治 利和、川辺 恵子、木田 桃子、北村 裕明、
木村 健治、櫻田 満、笹井 仁治、里西 薫、澤 孝彦、城田 義隆、
菅江 克弘、瀬澤 正孝、竹村 健、千代 博、辻 博子、寺本 勉、
長澤 嘉徳、中野 雅之、中村 淳子、苗村 卓也、橋 俊明、畠中 幸一、
広実 照美、福永 忠克、藤井 紗子、堀 茂樹、松本 直樹、村岡 孝浩、
日片 佳子、免 伸幸、森 良和、森 口 行雄、米倉 崇、匿名48名

(敬称略、50音順)

お知らせ

市民活動フォーラム2021開催 「移住者と地域との心地よい、つながり」(仮)

移住者と地域の人がともに居心地の良い関係で、地域づくりを進めるには? 移住者支援に取り組んでおられる方たちをスピーカーにむかえ、これから地域づくりについて考えます。

【日時】2022年1月22日(土) 13:00～15:30 (Zoom開催予定)

【講師】NPO法人結びめ 代表 清水 安治さん

NPO法人愛のまちエコ俱乐部 事務局長 園田由未子さん

上平寺御城下ゲストハウス「うむ」オーナー 川村千恵さん

【問合せ】淡海ネットワークセンター(北川・中川)

日本政策金融公庫国民生活事業は みなさまの身近な政策金融機関です。

- ・NPO法人のみなさまもご利用いただけます。
- ・新たに事業を始める方にもご利用いただけます。
- ・経営に役立つ情報をご用意しています。

新たに事業を始められる方へ

新規開業ローン

中小企業・小規模事業者のみなさまへ

国の事業ローン

お子さまの教育資金を必要とする方へ

国の教育ローン

お問い合わせは



日本政策金融公庫
国民生活事業

お名前 事務局事務 お問い合わせ窓口
お名前 事務局事務 お問い合わせ窓口

お気軽にお相談ください。

日本公庫

検索